溝上慎一の教育論（動画チャンネル） No20（心理学）

#1 アーネットの成人形成期論をもとに「主体」が立ち上がることを考える
―白井利明先生（大阪教育大学）にインタビュー

溝上　慎一　　Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

http://smizok.net/
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
＊詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画は溝上が個人的に作成・提供するものです

（ご紹介）

白井利明

しらい　としあき

大阪教育大学名誉教授

愛知教育大学卒、東北大学大学院博士課程
大阪教育大学助手、助教授、2001年教授を経て、
2022年4月より大阪教育大学名誉教授の称号

専門は、発達心理学・青年心理学

主著『＜希望＞の心理学』(講談社現代新書, 2001年)
第５回青年心理学会賞（2011年）を受賞。第3回国際時間的展望学会（デンマーク）で招待講演（2016年）

2022年～ 日本青年心理学会理事長

Number17（新著の紹介）

#2 白井利明・杉村和美著（2022年4月）
『アイデンティティー時間と関係を生きる－』新曜社

未来志向があってもアイデンティティが十分に持てずに混乱している、そんな青年を浮き彫りにしたい

大阪教育大学紀要
総合教育科学
第69巻
（令和3年2月）

MEMOIRS OF OSAKA
KYOIKU UNIVERSITY
Educational Science,
Vol.69（February 2021）

ジェフリー・アーネットにとって
成人形成期（emerging adulthood）とは何か
—発達心理学における社会構造と主体の問題—

白井 利明（しらい としあき）

総合教育系（学校教育部門）

それではご覧ください

Emerging Adulthood
成人形成期

- 2000年に「アメリカン・サイコロジスト」誌に発表し、反響を呼ぶ
- 青年期（10-18歳）→成人形成期（18-29歳）→ヤングアダルト期（30-40,45歳）
- アメリカの大学生200人に会って調査

ジェフリー・アーネット

欧米1980年代半ば、学校から仕事へのトランジッションが困難

- 不安定で、未来は見えないが、「最後は望むものになる」（89%）と信じ、現在の生活を楽しんでいる
- 大人になる＝就職・結婚ではない　→　経験を積みながら自分の足で立つことを学んでいくこと

ジェフリー・アーネット

「発達の主体」を考える

- 青年でも大人でもない時期＝単なる移行期ではない　→　それ自体で意味のある時期
- 発達権＝大人を乗り越える権利　子ども権＝子どもは子どもであるという権利（田丸敏高、2000）

ジェフリー・アーネット

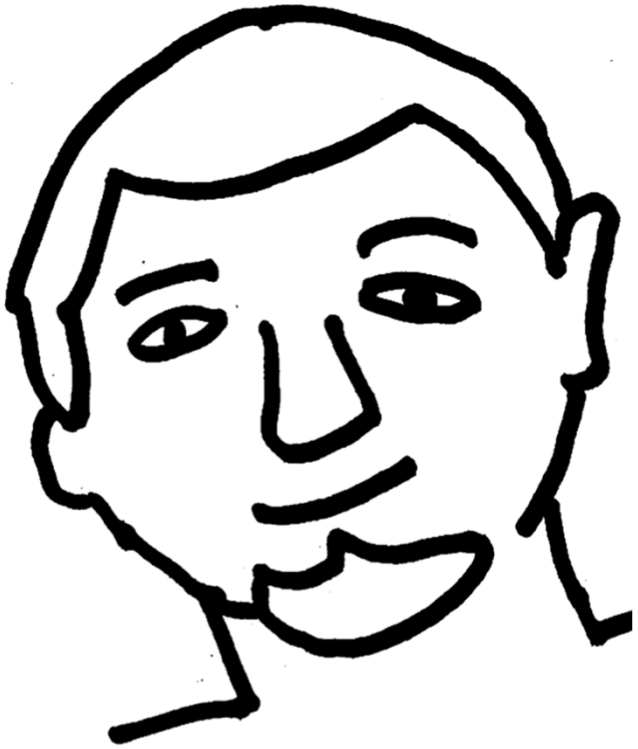
「成人形成期」は社会的排除を正当化する懸念

- 強制的に引き延ばされた「成人期への移行」
- 楽観性は自己存在の否定に対する反応
- 恵まれた社会階層だけで見てはいけない

ジェームス・コテ

「成人形成期」は発達段階ではない

- 移行期（退職期や離婚後の女性の心理と同じ）
- 文化差（イギリスでは悲観的）
- 発達的停滞（過保護で育てられ準備のないまま大人に駆り立てられた）であり、いろいろな青年がいる



レオ・ヘンドリー

若いひとの声をどう聴き届けるか

- 言葉の端を取りあげて楽観的であるとか楽しいだけしか考えていないとか、そんな訳がないのに、大人ならもうちょっと分かってほしいな。みんなはきっと前向きにプラス志向に生きていっているのをこれからも温かく見守っていただきたい（27歳・女性・非正規雇用・大卒）

研究会「職場の人権」（編） (2004). パネルディスカッション「若者の働き方・生き方を考える」職場の人権, *31*, 27−43.